

# 講演会要旨

## 1. 演題：「人文学研究叢書 43『自然・人間・神々——時代と地域の交差する場』を読む」

講演者：黒住 真

開催日：6月26日（水）17:00～20:00

会場：17号館216室

共同研究グループ「自然観の東西比較」で、東京大学名誉教授である黒住真氏をお招きし、人文学研究叢書43『自然・人間・神々——時代と地域の交差する場』の全体および個々の論文についての書評をしていただき、議論を行った。

まずそれぞれの論文を批評する講演がなされ、それに対して執筆者からの応答、そしてさらに黒住氏の意見、という形で活発な議論が交わされた。黒住氏はそれぞれの論文の学術的な意義のみならず不足点等も指摘され、さらには研究の進展のための事例や参考文献の紹介などもなされた。それらは執筆者にとって、また研究グループにとっても視野を広げる契機となり、極めて有益な内容であった。

以下に、黒住氏の講演レジュメのうち、最後の総括的な部分を引用する。

本書は、最初のヘーゲルの論理をさらに各地域へと展開しつつ、さらにその地平を調べようとするもの、根茎（じかた、rhizome）をも見出すものともいえるようだ。哲学でいうなら、ヘーゲルとともにその次のビエール＝フェリックス・ガタリ（1930-92）の論理を地球上に調べているものともいえる（『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳1986、宇野邦一訳2006、原著 *Anti-Oedipus* 1972）。あるいは女性的にはシモーヌ・ヴァイユ（1909-43）の『根をもつこと』（*L'Enracinement*, 1943）に関係するかもしれない。ともかく、本書は、大きくは従来の人間主体・男性中心だけではない、天地・神仏・女性・環境といった見落とされていたが現れ出て来るものを、読者に大事な示唆とともに与えて下さっている。

『自然・人間・神々』全体の意義について以上のような評価をいただき、研究グループとしての、今後の研究の方向性に関する示唆もいただいた。

読了を前提とした書評会ということもあって、研究グループのメンバー以外の参加者は少なかったが、予定の時間を大幅に超えて、3時間に及んだ講演会となった。

（文責 上原雅文）

## 2. 演題：モダニズムの芸術と文学

講演者：千石英世（立教大学名誉教授）

開催日：2019年7月19日

会場：17号館216室

共同研究グループ：各国近代文学の研究では、文字通り「各国」の研究状況とその方向性等々を多角的に検討していくことを目指している。メンバーが共有する関心として、これまでも世界文学や翻訳といった論題がとりあげられてきたが、今回は、アメリカ文学研究、翻訳、文芸批評といった広汎な領

域をまたいで活躍する千石英世氏をお招きして、「モダニズムの芸術と文学」と題して、ご講演を頂いた。

まず、今回のご講演のベースとして、千石氏のご論考「思考の水脈——抽象と抽象表現とフォークナー」(2018)を示された。ここには、千石氏の主要なキャリアである文学にくわえ、近年、とみに興味を示されてきた芸術(美術・建築)までもが視野に収められている。そればかりか、参考文献にはシモーヌ・ヴェユ「重力と恩寵」や、アインシュタイン『相対論の意味』が並び、これらも主要な議論の一部をなしている。

ご講演は、千石氏とそのノート類をまとめた美術家・斎藤義重から、村山知義、岸田劉生へと、水脈を遡行しつつ、日本にもたらされた表現主義／抽象の問題にスポットが当てられていった。それと並行するように、ご講演の通奏低音としては、『響きと怒り』を中心としたフォークナーの手法が論及されていく。ここでいう手法とは、一言でいえばモダニズム、具体的にいうならば、断片化されて複雑に配置された時間軸や、多元描写、意識の流れなどである。翻って、参照される芸術とは、キュビズムのパブロ・ピカソ、そしてドリッピング・アートのジャクソン・ポロックであった。彼らの表現をフォークナー、メルヴィルへと架橋する発想は、すでにクリメント・グリーンバーグによって示されているという。こうして文学／芸術、日本／ヨーロッパ／アメリカが、表現の水脈として連絡される。その連絡がどの程度に実証的なものとしてあるかではなく、連絡させた時に浮かび上がる水脈の連なりが、千石氏のご講演においては、その縦横無尽な展開によって現出＝幻出する。さらに抽象 abstract にフォーカスが絞られれば、「重力と恩寵」というテーマが導入され、(バロックではなく)ゴシックであるという命題のもとに、フォークナー／ポロックが再び招喚される。——強靱な思考が紡ぎ出す、めくるめく水脈を、まざまざと体感したご講演であった。

(文責 松本和也)

### 3. 演 題：水分子拡散現象に基づく骨格筋微細構造の可視化技術開発 スポーツ／医療分野への次世代型拡散 MRI 技術の社会実装

講演者：畑純一(東京慈恵会医科大学再生医学研究部, 理化学研究所, 実験動物中央研究所)  
中島大輔(慶應義塾大学医学部整形外科教室)

開催日：2019年12月7日

会 場：3号館206室

畑先生は水分子拡散現象の制限拡散を示す骨格筋微細構造を対象に、MRIのq空間(拡散による変位を対象とした波数空間)イメージング(Diffusion weighted imaging と呼ばれる拡散強調撮像法から非ガウス分布を示す制限拡散における水分子の変異を評価し、解析する手法)を用いることで、筋線維の構造と収縮特性を評価できる可能性をマウスやヒトを対象にした実験データを紹介して頂いた。Diffusion weighted imaging は水分子の拡散現象を反映させた撮影方法であり、広い流体を自由に拡散する水分子を対象としている。生体において、自由に拡散している組織は少なく、拡散が制限された組織が大変であり、制限拡散下では複数のコンパートメントが存在する可能性も指摘されている。コンパートメントモデルは複雑な構造となるので、生体内拡散の解析が複雑化してしまうが、q空間イメージングでは、この複雑なモデルを避けつつ、生体組織の制限拡散を解析できる利点がある。筋線維の直径は10~100 μm, 長さ1 cm 程度の円筒状の細胞である。q空間イメージングでは、この直径方向の構造情報を反映した値を算出し、評価することができる。畑先生が筆頭著者として書かれた論文「Noninvasive technique to evaluate the muscle fiber characteristics using q-space imaging」(PLOS ONE,

14 (4), e0214805, 2019) では、マウス下腿部の骨格筋断面の染色像と q 空間イメージングによる MR 画像を比較したところ、筋種類分布と筋細胞径に有意な相関関係が認められた。このことから、q 空間イメージングは非侵襲でありながら、組織学と同等の精度を持つ筋線維タイプを識別できる可能性があることを示した。中島先生は畑先生とともに開発された MRI の q 空間イメージングの社会実装の事例として、アスリートを対象とした横断的研究のデータ、高校生を対象とした縦断的研究のデータなどを紹介して頂いた。今後、骨格筋疾患の画像診断やそのメカニズム解明において新しい基準をもたらす可能性や、簡易な検査で筋種類分布や筋細胞径に基づくスポーツ適正判定が行える可能性、疲労度合い判定によるリハビリテーションやトレーニングのスケジュール管理、高齢者サルコペニアなどの ADL 低下の原因解明などに貢献することが期待される。

(文責 衣笠竜太)